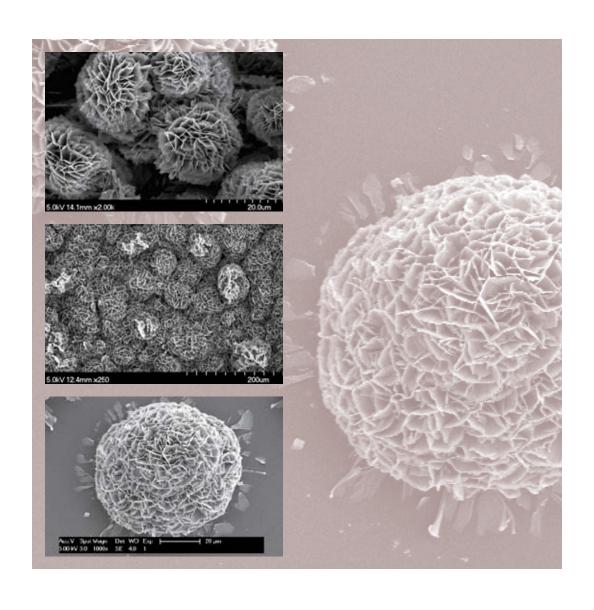
理工学部報



2009年9月20日



理工学部報 vol. 58

コラム なぜ、今、ロバスト最適化なのか?	2 武田 朗子
巻頭メッセージ 教育と研究のグローバリゼーション そのダ 理工学部長	
特集 矢上キャンパス施設の整備に向けての	4 取り組み 岡 浩太郎
KLL 慶應義塾先端科学技術研究センター(KLL)記	6 g立10周年を迎えて 植田 利久
国際交流 咸臨丸150周年:他人(ひと)とは違う自	7 3分を目指して 伊藤 公平
グローバル COE プログラム H19年度採択分/情報分野 H20年度採択分/機械分野	8 大西 公平 前野 隆司
教育への新しい風/教員からのメッ 基礎理工学専攻 総合デザイン工学専攻 チッテリ 開放環境科学専攻	セージ 9 南 美穂子 オ, ダニエル 藤代 一成
基礎理工学専攻 ギッテリ 総合デザイン工学専攻 チッテリ	南 美穂子 オ, ダニエル 藤代 一成 10
基礎理工学専攻 総合デザイン工学専攻 チッテリ 開放環境科学専攻 理工学部の近況 各学科主任・日吉主任・各専攻長から 受賞・受章 人事	南 美穂子 オ, ダニエル 藤代 一成 10 のメッセージ 14 15
基礎理工学専攻 総合デザイン工学専攻 チッテリ 開放環境科学専攻 理工学部の近況 各学科主任・日吉主任・各専攻長から 受賞・受章 人事 計報 就職状況	南 美穂子 オ,ダニエル 藤代 一成 10 のメッセージ 14 15 16

※表紙は、水と油にそれぞれ異なる物質を溶かし、水と油の界面を通してお互いに物質が行き来した結果生じたナノ構造体の電子顕微鏡写真。亜鉛と有機酸を含む水酸化物が2次元的な結晶成長をいくつも重ね、植物のような形をつくっています。このような手法が新しい物質合成のパラダイムとなるよう研究を進めています。(総合デザイン工学専攻藤原研究室修士1年井上沙羅撮影)

慶應義塾大学理工学部のホームページは http://www.st.keio.ac.jp/ です。

なぜ、今、 ロバスト最適化なのか? 管理工学科 武田 朗子



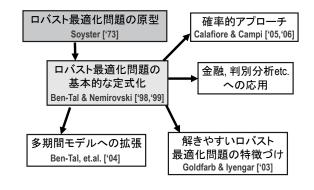
マジメな研究生活を送るようになって未だ10年前後の私がこのセリフを言うのは生意気な気もしますが、「どうしてあの研究分野がブレイクしたんだろうか」と気になっています。あの研究分野というのは"ロバスト最適化"という数理最適化の一分野のことです。

数理最適化とは現実の社会に現れる様々な問題を解決するための数理的アプローチの一つです。ロバスト最適化とは、問題を定義するデータが不確定な場合にも、信頼できる結果を返すような最適化問題のモデリング技法およびその解法を指しています。

実は、ロバスト最適化の原型は、1973年に A.L. Soyster (Pennsylvania State Univ.) によって提案されています。当時、この研究はほとんど注目を集めることがありませんでしたが、1998年に天才研究者 Ben-TalとNemirovskiがSoysterの研究成果を拡張してから、ロバスト最適化のブームがやってきました。最近はロバスト最適化の体系が固まりつつあり、初の教科書(洋書)出版も予定されています。

論文に新規性があって技術的に優れていてよく書けていることは、注目を集めるための必要条件ではあって十分条件ではないでしょう。他に何が必要でしょうか。ロバスト最適化の流行には、「今の時代に合った問題を捉えている」ことが大きかったのかもしれません。不確実性に対する意識の高い時代にロバスト最適化の考え方がうまくマッチしたのでしょう。Soysterの研究発表時には、まだ時代がついてきていなかったのかもしれません。Soysterのように時代の先ゆく研究、Ben-Tal&Nemirovskiのようにブームを作りだすような研究、そんな研究してみたいと高い(高すぎる?)モチベーションを持って、研究に励んでいます。

ロバスト最適化研究の様々な流れ



教育と研究のグローバリゼーション その先導者であるために

理工学部長 青山 藤詞郎



この度、真壁利明前理工学部長が常任理事に就任され、その後を引き継ぎまして、7月13日より理工学部長に就任いたしました。2008年に慶應義塾は創立150年を迎え、理工学部は今年で創立70年になります。この間、前身の藤原工業大学から工学部へ、そして理工学部へ、さらに大学院改革による教育研究体制の充実へと、慶應義塾大学理工学部・理工学研究科は着実な発展を遂げ、常にその時代における先導的な役割を果たしてまいりました。これは、諸先輩の多大なご尽力によるものであるとことを思い、あらためて敬意を表するとともに、今回、学部長をお引き受けすることの重責を強く感じております。

現在、矢上キャンパスを本拠地とする理工学部は、当時 工学部の学生であった私が、ちょうど学部3年生に進学す る年に、小金井から此の地に移転しました。毎年5月には、 紅白のつつじが満開となったキャンパス入り口の階段を 昇って教室に向かったことが思い出されます。それから、 37年の歳月が流れ、矢上キャンパスは、大きく変貌を遂 げてまいりました。矢上キャンパスに学ぶ学生数は、移転 当時に比べ2倍以上に増加しました。教育研究用建物の整 備が行われ、機能の充実とスペースの拡大が進められまし たが、矢上キャンパスにおける教育研究活動の急速な拡大 に追いつかず、学部卒業生の7割以上が大学院へ進学する に現在に至って、学生の実験・実習、研究遂行のための環 境整備が急務となっております。特に、矢上キャンパスへ の移転当初から設置されている、矢上川沿い30棟台のプ レハブ研究棟の老朽化と狭隘化は、ここで日夜研究を行っ ている学生諸君の安全確保の観点からも早急な改善が望ま れます。リノベーション計画の重要課題の一つに、新33・ 34棟の建設による矢上キャンパスの施設整備が挙げられ、 150年記念事業としての計画にも盛り込まれております。 2014年には、理工学部が創立75周年を迎えるこの機をとら えて、その実現への一歩が踏み出されようとしております。 ここで70年を振り返ってみますと、今更のように大学 に課せられている最も重要な使命は、人材の育成にあるこ とが理解されます。すなわち、4年間の学部教育とこれに 続く大学院における教育・研究活動を通して、いかに優れ た人材を育成し、これを継続的に社会に輩出していけるか

ということであります。そのためには、優れた素質を持っ た学生を国内はもとより世界から広く獲得し、彼らを世界 トップクラスの教育・研究環境のもとで、将来を担う優秀 な人材に育てあげるためのソフトとハードの充実が必要で す。理工学部では、前学部長のもとにリノベーション会議 が設置され、理工学部における構造改革計画が検討されま した。リノベーション会議の提言には、大きく分けて2つ の柱があります。その一つは、学部入学から博士輩出に至 るまでの教育・研究の充実であり、他の一つは、教員・研 究者という観点から真のグローバルリーダとしての研究者 の養成であります。具体的には、入試制度と学門別教育、 基礎教育と導入教育、学科教育理念の再構築、教育研究施 設の整備と改善、教育・研究活動の評価、大学院での教育 研究、学内委員会組織、教育・研究における連携が挙げら れています。現在は、これらの提言を受けて、可能なもの から実現へ向けた作業が進められております。博士後期課 程に在籍する学生支援プログラムの充実にも努力してまい りましたが、今年度より、新たに研究奨励助教制度が全塾 的に開始されるに至りました。優秀な学生の育成と、これ に携わる教員の教育・研究能力の向上が、車の両輪として 必要であり、今後も、この視点から理工学部の構造改革を 進めてまいりたいと考えております。

理工学部・理工学研究科におけるもう一つの重要課題には、教育と研究における連携体制の強化が挙げられます。国内大学間や地域における産学官の連携はもとより、国際間の連携が極めて重要な課題となっています。かねてより理工学部・理工学研究科では、グローバル COE の推進、ダブルディグリー制度の充実、ヨーロッパ工科系大学の連携組織への参入など数々の活動を積極的に進めてまいりましたが、今後も、これらの活動を発展させるために、より強力な支援体制が必要と考えております。教育と研究のプロジェクトを立案し、また積極的に参画していく為の、戦略的支援システムの強化が期待されます。

理工学部・理工学研究科におけるリノベーションを具体 的に目に見える成果として結実するために、教職員、同窓 生、学生とご家族、ご関係者の皆様の、より一層のご協力 とご支援を御願い申し上げます。

矢上キャンパス施設の整備に向けての取り組み

矢上キャンパス施設整備準備委員会委員長 企画室会議 (施設担当) 岡 浩太郎



1. はじめに

理工学部が小金井から矢上に移転したのは昭和47年 (1972年)であり、その頃と比して学部学生、大学院学生の人数は2000人から約4000人 (2009年4月現在)へと倍増しています。その間、教育研究用建物、最近では学術フロンティア棟および創想館の建設などが続いてはいるものの、古く老朽化した建物が未だ使われているというのが現状です。また単に建物の問題だけでなく、新規な研究分野への展開、生涯教育対応のための実習スペースの確保、障害者に対するバリアーフリーラーニングへの対応などを考えると、教育・研究環境の整備は急務であると思われます。

理工学部では平成15年度のキャンパス施設計画委員会答申をベースに、理工学部・理工学研究科が「逞しい研究者・技術者」を輩出するために必要な施設について、今後10年程度にわたり取り組む必要がある問題点について集中的に議論し、2008年5月に「理工学部・理工学研究科リノベーション会議答申書」として学部長に報告いたしました。その答申書に報告されている内容を中心に、現在矢上キャンパスで進められている矢上キャンパス施設整備の準備状況について紹介させていただきます。

2. 老朽・狭隘化する施設の改善

創想館の建設などを考えると学生数に比例するように理工学部の延床面積は増えているように感じられるかもしれません。しかしながら矢上キャンパスに在籍する学生数は、学部生が約1.5倍、大学院生数は4倍近くに増加しており、特に研究教育用建物延床面積と大学院生数の比率を考えると、現在の大学院生一人当たりの床面積は矢上移転時の約半分になっています。このことは学部4年生と大学院生が研究室で過ごす時間が長い矢上キャンパスの特性を考えれば、教育・研究環境は以前に比べ、十分確保されているとは言いがたく、その狭さは憂慮すべき状態であると思えます

また施設改善の問題は単に床面積だけではなく、学生の 安全および地域、環境への影響も考慮する必要がありま す。特に20棟台の研究室では漏水の問題は深刻です。主 に機械工学科、システムデザイン工学科の研究室が実験に利用している30棟台の研究室はいまだプレハブであり、学生実験の安全性を考える上で早急に対処すべき懸案です。また化学系廃液による下水の汚染の問題は、実験担当者の不注意だけが問題ではなく、環境と地域社会への安全という面から大学が施設等に責任を持たなければ、大学での教育・研究に大幅な制限が課せられるものと危惧されています。

3. 先導的基礎科学と革新的な高度複合技術のコアの構築

理工学研究科では21世紀 COE プログラムが採択され、またグローバル COE プログラムも現在進行中です。これら COE プログラムが卓越した研究拠点の形成を目指したものであることを考えると、国からの支援が終わったあとでこれらプログラムをどのように発展させてゆくのかについて、教育・研究スペースの確保も含めて十分検討する必要があります。

また研究面での今後の取り組みに関しては、「先導的基礎科学」と「革新的な高度複合技術」への展開が提案されています。そのような研究を推進するためには、性格の異なった新しい教育・研究施設を矢上キャンパスに設置することが必要であると考えています。そのような施設には、例えば特殊用途室(クリーンルーム、電磁シールドルーム、環境制御室)、高精度測定機器室、CAD実習室などを整備することが必要であるものと思います。これら基盤となる施設を矢上キャンパスに導入することにより、キャンパスの教育・研究環境を充実させるだけでなく、国家基幹研究への参入と受け入れが従来以上に容易になるものと期待されます。

4. 矢上キャンパス施設整備事業の基本コンセプト

以上述べたような矢上キャンパスの将来的な建替え計画を念頭におき、また性格の異なる2つの教育・研究施設の設置とその役割分担を考えながら、矢上キャンパスの環境改善を行うことを目的として議論してきました。またある程度具体的な工事年次計画を念頭に置き、矢上キャンパス

施設整備事業の基本コンセプトを以下のようにまとめました。

(ア) テクノロジーセンター (仮称)

総合的に分析、計測ならびに設計、加工が可能な施設を 設置します。特に従来矢上キャンパスに無かったナノ・マ イクロテクノロジーセンター(加工室、分析機器、クリー ンルームなど)と大規模実験・加工センターの複合施設を 設置し、外部資金による運営を目指します。

(イ) 教育用共通実習室

矢上キャンパスでは学科横断的な実習スペースの有効利用が図られてきました。機械系および電気系に関しては従来実習室スペースの有効利用が図られてきているものの、さらに他の実習室でもこれを推進し、一層の教育スペースの有効利用を図りたいと考えています。特に化学系実験室を共有化することにより、薬品取り扱いおよび廃液等の安全面も確保でき、学生にとっても魅力的な実験・実習スペースを提供することができます。具体的には、機械系実験・実習室、化学系実験室、管理工学実験室、デザイン工房等が計画されています。またこれら共有化により生じた空きスペースを学部または学科で管理し、安全な研究・教育の整備を目指します。

(ウ) 慶應義塾基礎科学・基盤工学インスティテュート (仮称) 将来の理工学での研究の糧になるような新規な研究分野を開拓するためのスペースを提供します。現在矢上キャンパスには KLL を中心に企業との共同研究や大型の国家プロジェクトに対応した賃貸スペースがあります。 この新しいインスティテュートでは KLL とは性質の異なった研究の支援を考えています。支援の一例としては、適切な審査により萌芽的な研究分野を選定し、スペースを貸与することにより、研究が軌道に乗るまで理工学部・理工学研究科で支援するようなことを計画しています。

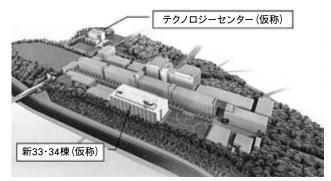
(エ) 機械工学科・システムデザイン工学科の既存の研究 室スペース

現在30棟台に研究室を構えている機械工学科・システムデザイン工学科の実験スペースでは、関係者の努力により実験スペースの整備が継続的に行われてきたものの、建物自体の老朽化は無視できない時期に来ています。そこでこれら既存学科のスペースについては、より安全な教育・研究を保証する新たな研究スペースを確保します。

以上の4点の他に、主に博士課程学生のために創発的な研究環境を提供することを目的として、議論・歓談が可能なディスカッションスペース等を矢上キャンパス内に確保することを進めてゆきたいと考えています。

5. 新しい矢上キャンパス創生に向けて

それではこれらの教育・研究スペースをどこに求めればよいのでしょうか? 矢上キャンパスで現在行われている教育研究活動にできるだけ支障をきたさないように配慮し、種々の条件を検討した結果、テクノロジーセンター(仮称)を地上3階程度の規模として矢上キャンパステニスコート南側に建設し、老朽化の進む現34棟(2階建てプレハブ棟)を地下1階、地上5階程度の教育・研究棟に建て替える案が計画されています。34棟の建て替えについては、現在使用している施設の一時的な移転場所が必要となります。そこでテクノロジーセンター(仮称)をまず先行させて建設し、これを、34棟建て替え時の移転場所として使用する計画です。34棟完成後は、テクノロジーセンターはその本来の機能を担います。



矢上キャンパス施設整備に伴う新棟建設 (現在計画中のもの)

6. おわりに

学部・大学院の学生が安全・安心な環境で教育・研究活動を行うことができるキャンパスの実現は高等教育機関としての重大な責任であり、そのような環境を整備することは急務です。また理工学部・理工学研究科は現状に甘えることなく、世界有数の教育・研究機関としてさらなるレベルアップを図っていきたいと考えています。「新しい酒は新しい革袋に盛れ」という故事に倣い、理工学部創立75年を控え、ソフトウェアとハードウェアの充実に向けていままで以上の努力を注いでゆきます。卒業生の皆様にも大所高所よりご意見をいただき、ますますのご支援とご協力をお願いする次第です。

慶應義塾先端科学技術研究センター(KLL) 設立10周年を迎えて



慶應義塾先端科学技術研究センター所長 植田 利久

慶應義塾先端科学技術研究センター (KLL) は、大学が保有するさまざまな理工学的な知的資産の社会貢献を迅速に進めるために、初代 中島真人所長のもと2000年に設立されました。その後、小池康博所長のもとで発展を遂げ、本年度で設立10周年を迎えます。また、KLL は、これまでは理工学部の一組織でしたが、本年度より塾組織となりました。このようなKLLの活動は、理工学部教員の理解なくしてはなしえなかったものと思っております。また、その活動は実務を担ってきたKLL委員、さまざまな困難な案件に対して適切な対応をとってきた事務担当者などの関係者、さらには国、自治体などの公的機関、企業の関係者の方々に支えられたものであり、みなさまに心より感謝いたします。

そして、本年度、KLL はあらたな出発の年としてスタートいたしました。

KLLの設立は、大学の役割にあらたな一面を加えたと考えることができます。従来、大学の主な役割は、研究と教育でした。現在もその重要性は変わりませんが、大学には、さらに大学が有するさまざまな知的資産を社会に広く還元し、社会貢献するという役割が加えられることになりました。しかしながら、大学は、もともと実務的な部分は持っていません。したがって、知的資産の社会での活用には、国、地方公共団体などの公的機関ならびに産業界との協力、連携、すなわち産官学連携が不可欠となります。おかげさまで、公的機関や企業などの委託元と受託者である大学研究者双方のご協力もあり、KLL はこれまでの活動を通じて多くの産官学連携を進めることができました。

この間、産官学連携のありかたも徐々に変わってきているように思われます。この10年間、KLL の歩みと共に、日本における産官学連携も大きく成長してきたのではないかと思います。10年前に比べると、より多くの教員、研究者が産官学連携研究に携わるようになってきました。また、プロジェクトを通じて、学生諸君は実社会との接点をもち、自らの研究の意味、意義を感じながら研究を進める機会が増えたのではないかと思います。また、大学には、プロジェクトを遂行するための人材が出入りするようになり、人材交流が活発になったのではないかと思います。他方、研究資金の使用方法、研究成果の取扱い、公的機関や企業などの委託元と大学教員との意識の違いなど、今後の課題となる問題も明らかとなってきました。このような問題は、KLL あるいは慶應義塾独特の問題というよりは、日本における産官学連携の問題ということができます。その結果、近年、産官学連携の進め方について毎年、修正、変更が加えられています。言い換えますと、昨年度まで許されていたことが、本年度は許されなくなることがあります。KLL では、このような社会環境の変化を受け止め、産官学連携がより適切に行われるように努めています。産官学連携にかかわる教員への新たな情報の提供だけでなく、常に意見交換をしながら、適切に研究が遂行されるよう、心がけています。

昨年10月の米国のサブプライム問題に端を発して、現在、世界は、100年に一度という経済的に不安定な状況となっていますが、大学においては、さまざまな興味深い研究が地道に、持続的に行われています。そして、これらの研究成果が、これからのあらたなライフスタイルを構築するために貢献できればと考えています。また、今後、国際的な産官学連携が重要さを増してくるものと思われます。さらに多様化する価値観のなかで、慶應義塾としてのスタンスを見失うことなく、柔軟に進めてゆけるよう努めてまいります。

研究における外部機関との連携は、今後さらに活発になると思われます。また、その形態はさまざまに変化してゆくものと思われます。KLL では、ますますのご支援、ご協力をいただき、真に社会に貢献する産官学連携を推進してまいりたいと考えております。

今後とも、なお一層のご指導、ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

咸臨丸150周年: 他人(ひと)とは違う自分を目指して



国際交流委員長 伊藤 公平

また150周年?と思われる方もいらっしゃるかと思いますが、来年(2010年)は咸臨丸渡米150周年にあたります。福澤諭吉先生が説得に説得を重ねて咸臨丸に乗せてもらい渡米したのが1860年、27歳の時でした。荒波を乗り越えてたどり着いたサンフランシスコで民主主義や基本的人権の考え方などを目の当たりにした福澤先生は、他の日本人とは違う若者、すなわち「他人とは違う自分」を確立されたと思います。

理工学部が国際連携を推進する原点は、「一人でも多くの学生に「他人とは違う自分」を築いてほしい」という教職員の願いです。例えばこれまでにも紹介をした仏エコールサントラルとのダブルディグリー制度。理工学部生が学部3・4年生時に相当する学年をエコールサントラルに入学をし、仏エリート学生の正式な一員として工学の基礎をすべてフランス語で学びます。私は現地の学生を毎年訪ねますが、一年目は努力の限界への挑戦で疲れきっている学生も、二年目には余裕の笑顔でフランス人学生にとけ込んでいます。あの厳しいカリキュラムをフランス語で学ぶからこそ、二年目にはフランス語を自由自在に操り勉強と遊びに励む笑顔が眩しい若者、すなわち他人とは違う自分に生まれ変わります。彼らはフランス語が堪能なだけではなく、フランスエリートの一員として強力なコネクションを持つ貴重な日本人であります。一人で飛び出した福澤先生とまで行かなくても、彼らは理工学部が用意した機会を上手に利用しました。そして将来は本当の実力を備えた「他人とは違う自分」として各界で活躍すること間違いなしです。

この他にも理工学部では様々な世界に飛び出るプログラムを用意しています。それらの概要は http://www.st.keio.ac.jp/contents/ic/index.html に示してあります。「形だけでの国際連携ではなく、本当の意味で学生に機会を提供する国際連携でありたい」というのが我々の目標で、そのために我々教職員も日々勉強と努力を重ねています。

福澤先生は1858年に蘭学塾を創設した後に訪れた横浜で英語が主要言語であることに衝撃を受けました。よって蘭学塾から英学塾への転換は咸臨丸での渡米前から始めるのですが、その方向性を咸臨丸で訪れた米国が決定的なものにしました。欧州歴訪はこの後のことです。振り返ると当然のサクセスストーリーでも、一つ一つの挑戦に挑むときの福澤先生の決断は相当なものだったでしょう。理工学部で国際プログラムを紹介する時にも必ず学生たちから「でもリスクもありますよね?」と聞かれます。留年、新型インフルエンザ、標準とされる就職路線からの逸脱などなど、確かに学生からみたリスクはあります。でも、難破するかもしれない咸臨丸のリスクとは比べものにもなりません。何が人生の明暗を分けるか判らないからこそ、明暗の「明」の部分をとことん追求する学生が一人でも増え、我々の国際交流プログラムを上手に利用してくれることを願っています。

■ グローバル COE プログラムについて

平成19年度採択分

グローバルCOEプログラムの紹介「アクセス空間支援基盤技術の高度国際連携」

拠点リーダー/総合デザイン工学専攻 システム統合工学専修 教授 大西 公平

個人の活動に合わせてディジタル支援を行う新しい人間中心の科学技術を追究しています。光・電子デバイスからネットワーク通信やハプティクスまで一貫した統合研究体制の下、革新的デバイス創成のための物理基盤工学、環境埋込みデバイス工学、実世界実時間ネットワーク通信工学、知覚・表現メディア工学の4分野で相乗効果を高めた研究を進めています。

これまでに研究員として博士課程学生 (RA) 55名を競争的に採用しました。RA はダブルディグリー制度、ダブルスーパーバイザ制度 (海外連携先教員を含む指導体制)、国際インターンシップや国外共同研究制度などが利用できます。これらの仕組みによりグローバル社会で活躍できるリーダーの輩出を目指しています。



- (1) 国際連携拠点の強化:39拠点に増加
- (2) 国際ワークショップ: 海外で10回開催
- (3) インターンシップ制度:長期4名、短期6名が国外拠点で共同研究
- (4) ダブルスーパーバイザ制度:4名が利用し学位取得
- (5) Distinguished COE-RA 制度:3名を認定・表彰
- (6) 教育プログラム:COE 科目に加えて特別講義33回開催、ウィンターキャンプ開催
- (7) 社会への情報発信:慶應テクノモール、PhD 論文コンテスト、G-COE シンポジウムを開催
- (8) 研究成果:ジャーナル論文169編、招待講演31回、国際会議発表280件など。
- 今後とも、ご支援ご指導を宜しくお願い致します。

平成20年度採択分-

「環境共生・安全システムデザインの先導拠点」プログラムの発足にあたって

拠点リーダー/システムデザイン・マネジメント研究科システムデザイン・マネジメント専攻 教授 **前野 隆司** (申請当時:総合デザイン工学専攻ライフデザイン工学専修)

2年目を迎えた本拠点では、理工学研究科における世界トップレベルの基礎学術の実績と、2008年度に新たに発足したシステムデザイン・マネジメント研究科における高い専門性を有する者(主に社会人)へのシステムデザイン・マネジメント教育というユニークな試みの強みを生かし、基礎力と総合力を両立する国際化時代の先導者を育成しています。すなわち、環境共生、安心・安全に代表される多様な価値を考慮して、エネルギーシステム、モビリティーシステム、ヒューマンマシンシステムなどの大規模複雑システムデザインを行う最先端研究によって、世界の学術をリードするとともに、研究や授業を通して環境共生・安全システムデザインを行える人材の育成を行っています。



博士課程学生は、最先端研究を行うのみならず、MIT、Stanford 大との協力に基づく世界に例を見ないグループデザインプロジェクト科目などの科目を履修することによって、「木を見て森も見る」ことのできる国際的にトップレベルの視野を身に付けます。研究面では、カーボンハイドレートによるエネルギ輸送システム、廃熱の再利用システム、安全で環境共生的な次世代自動車、人と調和的にコミュニケーションを行える次世代案内ロボットなどの大規模複雑システムデザインを対象に、システムのデザイン構想から個別の専門研究成果まで、世の中のニーズに合致した環境共生・安全システムデザイン成果を発信し、当分野の教育・研究の発展を世界的にリードしています。今後の成果にご期待ください。



教育への新しい風

南 美穂子 (教授): 数理科学科/基礎理工学専攻 数理科学専修

専門:データサイエンス・統計科学

着任して数ヵ月が経ちました。前職の統計数理研究所・総合研究大学院大学では、大学院生への講義や指導、公開講座での講義などをしていました。学部生への教育がメインとなる大学教員に戻るのは10年ぶりで、戸惑いと新たに知ること、改めて考えることの多い毎日です。

私の専門のデータサイエンス・統計科学は、データとその数理・統計モデルを考える分野横断型科学です。前職で担当した公開講座では、多様な分野のさまざまな立場の受講者がおり、何を前提知識としてどのように説明するのかはいつも悩むところでした。対照的に、大学での教育というのは教える側にとっても教えられる側にとっても効率のよいものだと思います。他方、白地のキャンバスに授業の内容



をそのままの色で受け入れる学生を見ていると、何をどのような視点で話すかを選択する責任を強く感じます。日々の学生 とのやりとりの中でこのようなことを考えつつ、学部教育に携わることができるようになったことを嬉しく思っています。

Daniel Citterio (Associate Professor): Department of Applied Chemistry / School of Integrated Design Engineering, Center for Science and Technology for Designing Functions

Specialized fields: Analytical Chemistry - Chemical Sensors

Research targeting the development of chemical sensors requires the involvement in various fields of science, reaching from chemical synthesis over spectroscopy to data processing.

I have had the chance to contribute to Keio's research in chemical sensors since I first arrived as a postdoctoral researcher in 1998. My present work is to a large extent devoted to the creation of sensors that are to become useful tools in various situations of daily human life. I aim at the development of alternative fabrication methods for chemical sensors, using inkjet-printing technology, with the goal of creating cheaper, but still better sensors affordable for everyone. Examples include low-cost sensing chips for medical analysis or the



monitoring of water pollution. It is my goal to provide a creative research environment by offering a large degree of freedom and self-responsibility for students.

藤代 一成 (教授):情報工学科/開放環境科学専攻コンピュータサイエンス専修 専門:コンピュータ可視化、コンピュータグラフィックス

米国 NVAC の試算によれば、1年間に新たに生成されるデジタルデータの総量が2010年には988E バイト (E は10の18乗) にまで達するそうです。「データビッグバン」とも称されるこの状況は、まさに昨今の ITC 技術が生み出したものです。計測やシミュレーションから生じるデジタルデータの山に埋もれた対象の構造や挙動を掘り起こすうえで、人間にとって桁外れに情報伝達効率の高い視覚的解釈の機会を提供するコンピュータ可視化技術は、重要な役割を果たすことが期待されています。



ユーザに代わって対象データを数理的に事前解析し、見せるべき価値がないと判断できる部分は潔く捨てる、あるいは可視化に関連するパラメタの自由度をむしろ制限することにより、無意味な最終結果

画像の出現を抑制するとともに、適切なパラメタ値を用いた程よい初期結果を与えて、ユーザの経験や勘を呼び覚まし、新 しい知見獲得のセレンディピティを向上させるようなスマートな可視化ソフトウェアを、本塾の学生諸君とともに発信して いきたいと考えています。

機械工学科の飛躍に向けて

機械工学科主任 菅 泰雄

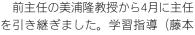
本年3月に徳岡先生が退職され、4月 より専任講師として荻原先生が着任 されました。その結果、当学科の教

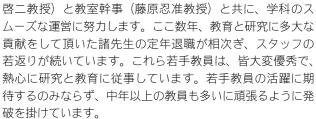


員はこの数年で10名以上入れ替わったことになります。今後は退職教員が徐々に減少する方向にあり、教員採用についても将来を見据えた議論が必要と思われます。一方、慶應義塾150周年記念事業の一環として理工学部の33棟、34棟の建替えが計画されており、関連の深い当学科ではその実現に期待しております(本稿執筆時点では確定していません)。さらに、来年度の大学院専修改組を目前に、当学科教員関連の専修の改革についても議論が進んでいるように聞いています。このように、機械工学科をとりまく環境は急激に変化しつつあり、将来を睨んだ新しい学科体制の構築が急務となっています。このような認識から、本年度より学科内に将来問題検討委員会および34棟建替準備委員会を発足し、今後の学科のあり方、教育内容・カリキュラム、新棟のフロアプランなど、学科の飛躍を図るための議論を開始しております。

応用化学科の近況

応用化学科主任 中田 雅也





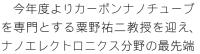
昨今100年に一度の不況と言われていますが、就職環境は必ずしも悪くはありません。約8割の学生は大学院に進学しますが、大学院生の就職も順調です。これも偏に卒業生諸氏のご活躍の賜物と感謝致します。

当学科は、理工学部の中で最も歴史のある学科の1つで、2009年3月までに6490人の卒業生を輩出しました。社会で活躍できる人材育成のため、基礎に重点を置いた幅広い教育を実施し、大学でしかできないような面白い研究に邁進します。

(応用化学科ホームページ http://www.applc.keio.ac.jp/)

電子工学科の近況

電子工学科主任 池原 雅章





の研究教育環境が整いつつあります。真壁学部長が7月から常任理事に就任されたため、兼担教授として電子工学科をサポートして頂くことになりました。昨年度は中島・中村両教授が退職されましたが、今後4年間で更に7名の退職者が見込まれ、電子工学科の約半数の先生が入れ替わるという激動の時代を迎えています。

教員19名、学生定員90名という工学系では小規模学科のため、全ての学生の名前が分かるとまではいかないまでも、学生との距離は近く、懇切丁寧な教育指導をモットーとしています。一方で、グローバル COE プログラムを通じて研究活動は益々盛んであり、国内外で高い評価を受けています。

大学内外ともに変革の時代を迎えますが、電気電子工学の基礎教育を重視しつつも、より高度な教育と最先端の研究を行う体制を整え、社会をリードする人材を輩出したいと思っています。今後とも先輩諸兄からの叱咤激励をお願い申し上げます。

ロマンチストとセンチメンタリスト 一物理情報工学科 過去・現在・未来―

物理情報工学科主任 畑山 明聖

人は、ふたとおりに分類されると



聞きます。ひとつは、センチメンタリスト、そして、もうひとつはロマンチストです。センチメンタリストは、過去の感傷にひたる人、一方、ロマンチストとは未来に向けて夢を語る人です。物理情報工学科設立から10数年、今年3月、学科設立に尽力された南谷先生が退職され、本塾名誉教授、千歳科学技術大学教授として新たに旅立たれました。我々は、過去からのしっかりとした学問と技術の継承、そして教育・学問の体系化を進め、その上で、未来に向けて、真の夢をおおいに語ることのできる永遠のロマンチストでありたいと考えています。今後とも、学科への変わらぬご支援、ご叱責を賜りますよう、何卒、宜しく御願い申し上げます。

南谷先生の他、齊藤英治専任講師、堀切康平助教が3月で 退職され、また、塚田孝祐専任講師、鈴木博之助教、タン・ コック・リァン助教が4月より新たに着任されました。

管理工学科の近況

管理工学科主任 増田 靖

管理工学科では、来春に川嶋弘尚 先生が定年退職されることに伴い、 現在、新規教員を迎えるべく準備が



進んでいます。今年度を含めるとこの4年間で7名の方が定年退職ということになります。それにともなう新任人事で、管理工学科教員の大幅な若返りが起きています。新任教員が巻き起こす新風の影響か、管理工学科卒業生の大学院進学率は上昇傾向にあります。また、今年度は、枇々木規雄先生が教授に、高橋正子先生が准教授に昇格され、市来寄治先生を助教(有期)として迎えました。

今年度、管理工学科は設立50周年を迎えます。2010年3月13日に日吉キャンパスで記念の講演会・懇親会を開催する予定です。詳細は追って管理工学科ホームページでお知らせいたします。管理工学科が、先輩諸兄が築き上げた管理工学科の伝統を踏まえつつ、激変を続ける社会の要求にいかに今後も応え続けるかを検討する良い機会と考えております。

(管理工学科ホームページ http://www.ae.keio.ac.jp/)

物理学科の近況

物理学科主任 齋藤 幸夫

物理学科では、多様な自然現象の 背後に潜む普遍性を見抜き、最新の 科学技術への応用にも対処できる人



材を育てるべく教育ならびに研究をしております。その表れの一つとして、本年度の同窓会表彰には、野本和正氏(1989年卒、有機 EL ディスプレーの実現)、中村真氏(1992年卒)と高橋繁樹氏(1996年卒、マッキンレー山頂への気象観測機器設置)の、3名もの物理学科卒業生が選ばれ、社会での活躍を示してくれました。

学科では、昨年度、岡朋治准教授、田中邦彦助教を迎え、これまでになかった新しい研究分野として観測に立脚した宇宙実験物理の研究室が立ちあがりました。また、本年度は、メソスコピック系の理論の江藤幹夫先生および極低温実験の白濱圭也先生が教授に、一般相対論の古池達彦先生が専任講師にと、それぞれ昇格されました。来年、再来年には4名の教授が定年退職されます。これまでの成果を継承発展させるにせよ、新たな分野に人材を求めるにせよ、これからも世界に伍し、またリードしていける学科を目指します。(物理学科ホームページ http://www.phys.keio.ac.jp/)

数学

数理科学科主任 仲田 均



さまざまな問題に現れる考え方、 方法を出来る限り一般化・抽象化し て記述することが、現代の数学の一

つの特徴と思います。結果的にそれが、思いもかけない応用を生み出すこともありますが、専門家以外の人たちにまったく訳の分からない学問分野を作り出してしまった面もあります。だれにでも分かりやすい数学というのもあって悪くはないのですが、難しくしたがるというのも専門家の癖なのでしょう。もちろん単に難しくしたくてそうするのではなく、そういうものが必要になった理由が数学の長い積み重ねの歴史の中にあるのです。

数理科学はいうまでもなく数学を基盤にした学問領域です。数理科学科で学ぶ学生は必ずしも「難しい数学」の研究者になる人たちばかりではありません(そうなる人はむしる少数)が、「訳のわからない」といわれる数学をしっかり身に付けながら思いもかけない応用を見つけるような学生が多く育ってくれたらと思います。多くの人が知っているような簡単なことを使って、思いがけない成果を出すのも数学の面白さのひとつですが。

化学科の近況

化学科主任 藪下 聡



化学科では、本年3月に照屋俊明助 教が琉球大学教育学部准教授として、 また佐藤宗英助教が物質材料研究機構

に栄転されました。4月には無機物性化学研究室に山本崇史助教が、また物理化学研究室に小安喜一郎助教が着任しました。新任の二人は本化学科出身で、外国でポストドク生活を行った後の着任です。彼らの成長をうれしく思うとともに、これから新しい化学の息吹を吹き込んでくれることを期待しています。

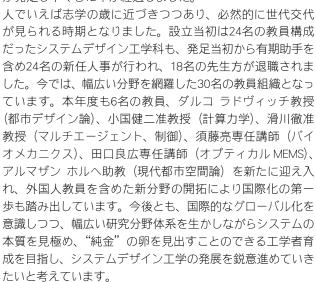
私たちは毎年4月に、各研究室の活動状況を集計していますが、教員・学生とも非常に活発でこれまでの良き伝統を守っているように見受けられます。特に本年3月の日本化学会第89春季年会では、中嶋敦教授が学術賞を受賞しました。これは昨年度の山元公寿教授に引き続く快挙です。また今回も化学科関係の大学院生が6件も優秀講演賞や学生講演賞を受賞するなど大活躍で、頼もしい限りです。今後ともきめ細かな少人数教育の特徴を生かして、教職員が一丸となって魅力ある教育と世界に誇れる研究を推進していく所存です。毎年この記事を執筆するのは来年度の人事を進める時期にあたります。新しい時代に即した化学科のあるべき姿など、学科内でも話し合っていますが、皆様からのご意見もどうぞよろしくお願いいたします。

(化学科ホームページ http://www.chem.keio.ac.jp/)

システムデザイン工学の グローバル化に向けて

システムデザイン工学科主任 菱田 公一

1996年にシステムデザイン工学科が発足し早くも12年が経過しました。



(システムデザイン工学科ホームページ http://www.sd.keio.ac.jp/)

ポストゲノムに向けて

生命情報学科主任 富田 豊

03年4月にヒトゲノムの全塩基配列が解読され、その後はポストゲノム研究の生命情報学科の時代になりました。本学科は、07年に初めて修士課程修了

者を送り出し、もう社会人になって3年目になります。3月には博士課程で学位を取得した早期修了者も出ました。彼らは早晩社会を引っ張るリーダーになってくれるでしょう。 本年度から舟橋啓専任講師が准教授に昇格され、新任の広井

本年度から舟橋啓専任講師が准教授に昇格され、新任の広井 賀子助教とともに新たに「システム生物学研究室」を立ち上げ ました。堀田耕司助教が専任講師に昇格されました。小林一也 助教が退職されました。一昨年退職された太田博道名誉教授が 長崎県立大学理事長に就任されました。まだ小さな若い学科な ので、ご支援をよろしくお願いいたします。

生命情報学科は授業以外でも歓迎会、送別会、ソフトボール大会など頻繁にイベントを催し、学生とのコミュニケーションを図り、学生を非常に大事にしています。彼らの意欲を十分に吸い上げるよう、生物、物理、化学、情報とさまざまな角度から生命科学にアプローチし、学生の興味に応じて研究室を選択できるようになっています。

生命情報学科はこれから発展・成熟の第二期に向かいます。 今後ますます重要性が高まるであろう当分野で、国際的に活躍 し、社会のリーダーになる人材を育成するため、さらなる研究 教育環境を整えていくよう努めたいと思います。

(生命情報学科ホームページ http://www.bio.keio.ac.jp/)

新しい価値を創造できる独創性 豊かな人材の育成をめざして

情報工学科主任 笹瀬 巌



情報工学科では、コンピュータ技 術、音声・画像などの情報メディア

技術、ネットワーク・無線などの通信技術を3本柱にして、 基礎知識・専門知識の十分な習得と産業界のニーズを踏ま えた教育・研究の充実を図ってきました。また、グローバル COE プログラム「アクセス空間支援基盤技術の高度国際連 携」やプロジェクトなどを通じて技術先導を果たし、国内外 で高い評価を受けています。一方、厳しい経済状況下で、よ り高度な技術力とマネジメント力を身につけないと、国際社 会では生き残れないという切迫感が強まっています。情報工 学科では、高度の知識や技術の習得だけでなく、新しい価 値を創造できる独創性豊かな人材の育成ができるよう、アク ティブな研究教育環境を整え、皆で切磋琢磨していく所存 ですので、今後とも皆様からのご指導ご鞭撻よろしくお願い 申し上げます。なお、近況報告としては、ノジク ビンセン ト先生と大野将樹先生が退職され、藤代一成先生が教授に、 また、植松裕子先生が助教に就任されました。また、大槻 知明先生が教授に昇格されました。

(情報工学科ホームページ http://www.ics.keio.ac.jp/)

教育環境いよいよ充実

日吉主任 大谷 弘道



日吉キャンパスは、創立150年を記念して計画された建物が次々に完成し、稼動し始めました。日吉駅を降



りて向かって右側には協生館、そして左側には新校舎「独立館」が今年完成し、見違えるような広々とした良質な教室空間が生まれました。学生たちはキャンパス生活を楽しみ、サークル活動で夜遅くまでキャンパスを去ろうとしません。卒業生には一度機会をつくって、ぜひ日吉キャンパスを見ていただければと思います。学生たちの生き生きとした姿を見れば、おそらく自分の子供は、何が何でも慶應義塾で学ばせたいとの思いがこみ上げてくると確信しています。

さて日吉の教員の近況ですが、一昨年はフランス語の森 英樹教授、昨年は英語担当の石井達朗教授が退職されまし た。森教授に代わって小野文専任講師(有期)、石井教授に 代わって杉山由希子専任講師がそれぞれ就任されました。 女性教員が少ない理工学部にあって、日吉は女性の活躍ぶり の点で、唯一気を吐いています。

テクノロジーセンターに期待

基礎理工学専攻長 宮島 英紀





国立大学の法人化(04年)と強弱2分極 化、21世紀 COE プログラム (02年) や 各種大型研究助成制度の設立など、文 科省的には「第三者評価に基づく競争 原理により競争的環境を一層醸成し、 国公私を通じた大学間の競い合いがよ り活発に行われること」になったので すが、研究の争覇も一段と激しくなり ました。研究助成の募集を事前に察知 して申請の準備をする、より大型の研 究費を獲得して、他人が手の出せない ような高額の機器(たとえば、遺伝子 解析装置や超微細加工装置など)を購 入する、他人が1週間かけて測定すると ころを1日で済ます、他人が2ケタの精 度で分析しているところを4ケタで分析 する、そして、いち早く注目度の高い 論文誌(新聞やTVならベスト)に発 表して次の研究費獲得に繋げる、こう いったアグレッシブな研究者が高評価 を受けて賞賛されています。しかも、 この試合には「間接経費」という巧妙 なエサが付くので、見物客・応援団も 巻き込んだ人馬一体型レースになりま

理工学部も私大の中では最前線で頑 張っているのですが、一喜一憂です。 この一因は強力な研究支援機関が無い ことです。理工学部には支援機関とし て中央試験所(古めかしい!)があり ますが、この10年に有効な設備投資が 少なかったせいか、息切れ状態です。 私は、創立150年記念事業の一つとして 建設が決まったテクノロジーセンター TC(仮称)が、新しい支援機関として、 また、理工学部の教育・研究の中心と して稼動していくものと大いに期待し ています。現在、岡浩太郎先生を中心 とした TC 委員会で計画が進んでいます が、大勢の支援と協力が必要です。完 成した暁には「勝ち組大学」に伍して 教育と研究が進展することでしょう。基 礎理工学専攻にとって大変楽しみです。

大学院博士課程の現況

総合デザイン工学専攻長 小原 實

日本の産業の 発展を振り返っ てみたい。戦前 は、大学学部卒 の技術者がリー



ダーとなって産業を発展させた。戦後は、大学院修士課程修了者の技術者がリーダーとなって、産業を復興・発展させてくれて今日の我国があります。21世紀は、博士課程修了者が高度技術産業の発展のリーダー役を担う事が期待されます。

文科省が大学院重点化を唱えて久しい。文科省によると国立大学院の現在の入学定員は総計概ね5万7000人。うち修士課程が約4万3000人で、博士課程は約1万4000人。1989年度の博士は7346人で、この20年間で倍増。しかし、昨年10月時点で、定職に就けない博士は1万6000人にのぼるという。この現状に鑑みて、文科省は博士課程の定員削減を模索中。

さて、慶應義塾大学大学院総合デザイン工学専攻では、修士課程の定員は200人であるが200人を超える学生を毎年輩出。一方、博士は定員が50人で、毎年30~40人が入学。3年間以内での博士学位取得率が2009年3月では約75%であった。できればこの数値をさらに上げて100%にしたい。

博士には学術の継承・発展に加えて、 社会のさまざまな分野でリーダーとし ての高度ミッションがある。博士が活 躍して頂くには、(1)アウトカムの視点 から、大量の情報を解読し研究として 最重要課題を設定、(2) 人的資源の集 中、(3)目標達成への個性的・創造的行 動が必須である。博士課程を通じて、 上述の能力を習得していただきたい。 研究成果と並行して、特に強調したい のは博士の育成です。優秀な博士の育 成は、長期的にみて研究の成功を担保 する最も確実な方法です。本年度から 理工学研究科では、助教(有期・研究 奨励)の職位を用意し、博士育成をさ らに後方支援しています。「グローバル COE」でも RA として博士育成を支援し ています。結実すれば、日本の将来は さらに輝きを増すでしょう。

多様性

開放環境科学専攻長 櫻井 彰人

昨年10月より 中川正雄先生の 残任期間をお引 き受けした櫻井 です。大学院(修



士課程)への進学希望者が、危機的な経済状況の影響で、大きく増大するかと思われていました。6月入試志願者数でみますと、変動はありますが、ここ3年では漸増傾向にあります(当専攻は明確に増えております)。

危機的不況に突入して以降、選択と 集中がより一層重要なキーワードと なっています。しかし、他方で多様性 の必要性も十分に認識されています。 機械学習の一手法にアンサンブル学習 と呼ばれるものがあります。未来予測 のオラクル法のように、知恵者ならぬ、 多数の学習機械の結果を統合する方法 です。この時、個々の学習機械の得意 分野が異なる方がよいのです。

変革は辺境からという言葉があります。マックスウェーバーの言葉とも大塚久雄の言葉とも考えられます。辺境が本質なのではなく、正統から外れたものこそが変革の源泉だという意味でしょう(それは正統に内包できないですが)。奇貨おくべしという言葉があります。瞥見しただけでは役に立たないと思われるが実は有用なものを、慧眼の士ならとっておくべきと解釈できます。

世間が選択と集中というなら、我々 大学が多様性を謳うべきです。理工学 研究科全体としてみますと、ここ4年の 間に年平均14~15名ほどの教員が入れ 替わっていますが、瞥見するに、本塾 は選択と集中より多様性を選択しています。また、いつの時代にも若者は出る ます。また、いつの時代にも若者は出る が、それは旧教を 感知し意識せずとも独自性を探泉をら でしょう。これは、多様性の源泉 でしょう。です。慶賀すべきことに、我々 の大学院はこの新人類を多く抱えこん でいます。

開放環境科学専攻は、伝統と革新とそして多様性とを標榜し、実際に新しい面白い研究を行ってきています。学生の瑞々しい感性と、過去を知りつつ過去に囚われない教員とが一体になって、さらに新しい世界を切り開いていきます。

受章

安西祐一郎「平成20年春紫綬褒章」 受章日:2008年4月29日

受賞

高橋 正子「日本経営分析学会学会賞|

受賞日:2008年5月10日 授賞者:日本経営分析学会

大西 公平「業績賞|

受賞日:2008年5月23日 授賞者:社団法人 電気学会

氏家 良樹、松岡 由幸「日本設計工学会 論文賞|

受賞日:2008年5月23日 授賞者:日本設計工学会

横山 由広「第5回日本独文学会賞 (ドイツ語研究書部門)」

受賞日:2008年6月14日 授賞者:日本独文学会

萩原 将文ほか「グッドプレゼンテーション賞 |

受賞日:2008年6月29日 授賞者:日本デザイン学会

足立 修一、佐野 昭

「2008年度計測自動制御学会学会賞(教育貢献賞)」

受賞日:2008年8月21日

授賞者:社団法人 計測自動制御学会

桂 誠一郎

「欧州パワーエレクトロニクス&モーションコントロール

会議最優秀論文賞」 受賞日:2008年9月2日

授賞者:欧州パワーエレクトロニクス&モーション コントロール会議

コントロ ル 五成

氏家 良樹 「日本デザイン学会 研究奨励賞」 受賞日: 2008年11月1日

授賞者:日本デザイン学会

栄長 泰明

[APA(Asian Photochemistry Association)-Prize for Young

受賞日:2008年11月2日

授賞者: The Asian and Oceanian Photochemistry
Association

阿部 仁

「表面科学とナノテクノロジーに関する国際シンポジウ

ム 最優秀ポスター賞」 受賞日:2008年11月11日

授賞者:社団法人 日本表面科学会

牧 英之

「第45回日本電子材料技術協会秋期講演大会優秀賞」

受賞日:2008年11月14日 授賞者:日本電子材料技術協会 柿沼 康弘「研究業績賞|

受賞日:2008年11月21日

授賞者: 社団法人 日本機械学会 生産加工·工作機

械部門

伊藤 公平「日本学術振興会賞」

受賞日:2009年3月9日

授賞者:独立行政法人 日本学術振興会

桂 誠一郎 「矢崎学術賞 奨励賞」

受賞日:2009年3月12日

授賞者:財団法人 矢崎科学技術振興記念財団

上村 大輔「2008年度内藤記念科学振興賞」

受賞日:2009年3月17日

授賞者:財団法人 内藤記念科学振興財団

桂 誠一郎「平成20年 電気学会 優秀論文発表賞」

受賞日:2009年3月18日 授賞者:社団法人 電気学会

中嶋 敦「日本化学会 学術賞」

受賞日:2009年3月28日 授賞者:社団法人 日本化学会

松原 輝彦

「第23回 若い世代の特別講演会講演証(日本化学会

第89春季年会)」

受賞日:2009年3月30日 授賞者:社団法人 日本化学会

柿沼 康弘 [日本機械学会奨励賞(研究)]

受賞日:2009年4月7日

授賞者:社団法人 日本機械学会

宮田 昌悟 ほか「日本機械学会賞(論文)」

受賞日:2009年4月7日

授賞者:社団法人 日本機械学会

高橋 大介「日本化学会第89春季年会優秀講演賞(学術)」

受賞日:2009年4月13日 授賞者:社団法人 日本化学会

阿部 仁「表面科学学術講演会 講演奨励賞」受賞

受賞日:2009年5月16日

授賞者:社団法人 日本表面科学会

山崎 信寿「第59回自動車技術会論文賞」

受賞日:2009年5月21日

授賞者:社団法人 自動車技術会

三田 彰「日本建築学会賞(論文)」

受賞日:2009年5月29日

授賞者:社団法人 日本建築学会

新任

+14	4177
衩	乜

粟野 祐二 ナノエレクトロニクス、ナノマテリアル 工 学 科 データサイエンス、多変量解析 理科 学 科 数 南 美穂子

情報工学科 藤代 一成 ビジュアルコンピューティング、可視化分析 ラドヴィッチ、ダルコ システムデザイン工学科 Architecture, Sustainability, Urbanism

●准教授

子工学科用化学科 雷 青木 義満 チッテリオ、ダニエル 応 システムデザイン工学科 小國 健二

画像工学、画像計測、画像認識 分析化学 センシング&シミュレーション、計算力学 システムデザイン工学科 滑川 徹 分散・協調・フォーメーション、制御工学 システム生物学・定量生物学・並列処理 生命情報学科 舟橋 啓

邦彦

批ク木規雄

白濱

幹雄

+也

哲

●専任講師

杉山由希子 械工学科 荻原 直道 物理情報工学科 塚田 孝祐

音声学(音声産出と知覚)、心理言語学 バイオメカニクス、解剖学、自然人類学 生体医工学、光·画像工学

システムデザイン工学科 田口 良広 システムデザイン工学科 須藤

> 科 菊地

マイクロ・ナノ熱工学、Optical MEMS 再生医工学、マイクロ流体工学、生体工学

電波天文学、分子雲、銀河中心

●助教

機械工 科 氏家 良樹(有期)設計方法論、デザイン工学、CAD、CAE 機 械 エ 学 啓晶(有期) 圧縮性流体力学、固気二相流解析、固体燃焼 科 三浦 応 材料化学 用 化 学 科 緒明 佑哉(有期) 応 用 14. 学 科 貝原 祥子(有期) 高分子化学 学 知野(有期) 化 科 松井 牛物化学 応 用 物理情報工学科 揺らぎのエネルギー論、熱力学第二法則 博之(有期) 鈴木 物理情報工学科 タン、コック リアン (有期) X線 CT 画像処理、気管支の三次元再構成

市来嵜 治(有期) インダストリアル・エンジニアリング

化 学 科 長岡 修平 化 学 科 山本 崇史(有期) 小安喜一郎(有期) 化 科 システムデザイン工学科 アルマザン、ホルヘ (有期)

物 理 学 科 田中

化

理

理

管

物

錯体触媒、不斉合成反応、酸化反応 クラスター科学、有機単分子膜、赤外分光 超薄膜、フォトクロミズム、無機ナノシート クラスター、ナノ物理化学、電子分光 建築設計、現代都市空間論

コンピュータビジョン、複合現実感 報 工 学 科 愭 植松 裕子(有期) 生命情報学科 広井 賀子(有期) 定量的生物学、システム生物学、分子生物学

昇格

理 丁 学 科

●教授

ドイツ語学、語学教育、対照言語学、言語哲学 ナノフォトニクス、半導体光物性、顕微分光 Н 泉 敏治 学 雷 Т 科 畜木 用化 学 科 有機物質化学 応 朝食 浩一 応 用化学 科 吉岡 直樹 有機機能材料化学 医用画像処理、非破壊検査、GPS 田中 納幸

玾 学 物 学 愭 報 Т

金融工学、リスク管理、ポートフォリオ最適化 理論物理学、半導体物性、メゾスコピック系 低温物理学、量子流体・固体

物理情報工学科

科 大槻 知明

科 汀藤

科

学 科

学

Т

無線通信、ユビキタスネットワーク

●准教授

クラスレート水和物、エネルギー技術 械 工 科 管 理工学科 高橋 正子 企業行動、環境経営、経営分析

数 理 科 学 科 小田 芳彰 離散数学、組合せ論、アルゴリズム

●専任講師

物理情報工学科 牧 英之 ナノ物質、ナノデバイス、材料物性 数 理 科 学 科 坂川 博宣 確率論、統計力学 システムデザイン工学科 髙橋 下樹

制御工学、宇宙工学、ロボティクス

生命情報学科 堀田 耕司 理 学 科 古池 達彦 ホヤ、比較ゲノム、化学発生生物学、発生進化 -般相対性理論、量子情報·計算理論

退職

●教授 \Box 石井

	在職期間
達朗	1971/4/1~2009/3/31

舞踊論、身体文化論

現職 慶應義塾大学、法政大学、県立愛知芸術大学・非常勤講師、 早稲田大学・客員講師

械 工 科 李 軍(有期) 機 電 学 科 中村 義春 子 I I 学 電 科 中島 真人 用 化 学 科 ШΠ 春馬 応 科 皇平 応 用 化 学 碩 応 用 化 学 科 井上 秀成 物理情報工学科 南谷 晴之

2008/4/1~2009/3/31 1969/4/1~2009/3/31 1972/4/1~2009/3/31 1969/8/1~2009/3/31 1969/11/1~2009/3/31 1972/4/1~2009/3/31 1970/4/1~2009/3/31

Turbomachinery flows and heat transfer 気体中の電子輸送特性と電子衝突断面積 画像工学・情報工学 高分子化学 高温合成化学 応用錯体化学 生命生体物理情報、バイオイメージング

東京電機大学工学部電気電子工学科(特任教授) (株)シーエムディーラボ (CMD Lab.) 取締役 神奈川大学工学部・特任教授

システムデザイン工学科 佐野 昭 システムデザイン工学科 裕久 野口 システムデザイン工学科 胐 研吾

1971/4/1~2009/3/31 1994/4/1~2008/8/22 2001/4/1~2009/2/28

制御工学、システム同定、適応制御 計算力学、連続体力学、構造システム工学環境デザイン、領域型デザイン

千歳科学技術大学総合光科学部バイオ・マテリアル学科・ 特任教授、静岡理工科大学総合技術研研究所·客員教授 慶應義熟大学・非常勤講師

●准教授

械工学科 徳岡 直静 機 数 理 科 学 科 森吉 仁志 1971/4/1~2009/3/31 1998/4/1~2009/3/31

微粒化/噴霧/微粒子 位相幾何学、微分幾何学、大域解析学

名古屋大学大学院多元数理科学研究科・教授

東京大学大学院工学系研究科・教授

●専任講師

生命情報学科

物理情報工学科 齊藤 英治

2001/4/1~2009/3/31

物性物理、スピントロニクス材料

東北大学金属材料研究所・教授

●助教

機 学 科 青柳 吉輝(有期) 械工 学 梅澤啓太郎(有期) 応 用 14. 科 物理情報工学科 康平(有期) 堀切 化 学 宗英(有期) 佐藤 科 学 化. 昭屋 科 俊明 システムデザイン工学科 福屋 粧子(有期) システムデザイン工学科 田中 直 人 (右期) 報工学報工学 大野 科 将樹(有期) /ジケ、ビンセント (有期) 科

小林

一也(有期)

2006/4/1~2009/3/31 2008/4/1~2009/3/31 2008/4/1~2009/3/31 2008/4/1~2009/3/31 2006/4/1~2009/3/31 2006/4/1~2009/3/31 2007/10/1~2009/3/31 2006/4/1~2009/3/31 2008/4/1~2008/8/31 2008/4/1~2009/3/31 計算塑性力学、結晶塑性モデリング 分析化学 固体物理、薄膜、絶縁破壊 有機無機バイブリッドナノ材料 光機能材料 天然物化学、生物現象解明、生物活性物質 建築、環境、ランドスケープデザイン 非線形有限要素法、有限変形解析 自然言語処理、情報検索 自由視点ビデオ、コンピュータ・ビジョン 性と生殖、動物進化生態学、扁形動物

慶應義塾大学理工学部・訪問研究員 慶應義塾大学医学部特別研究助教 独立行政法人 物質材料研究機構・研究員 琉球大学教育学部・准教授 福屋粧子建築設計事務所・代表 (株)豊田中央研究所·副研究員 白然言語処理 情報檢索 雷気诵信大学電気诵信学部情報工学科 LINIVERSITÉ PARIS-EST MARNE-I A-VAI I ÉE

追悼

國尾 武先生

國尾 武先生は、去る平成20年7月17日に84歳でご逝去されました。先生は「材料の強度と破壊」や「実験応力解析」の分野で世界的な業績を上げられましたが、人材育成の面でも多大な貢献をされました。昭和35年4月、未だ戦後の面影が色濃く残る小金井キャンパスの機械工学科に「材料工学研究室」を開設、そこには学部の卒業研究

にとどまらず、博士課程までの進学を希望する多くの学生達が集まりました。先生は常に、「研究で成果を出すことも重要だが、学生達にとっては、ともすれば楽な道を選ぼうとする自分の気持ちに打ち克って努力を続ける過程こそが大切なのだ」と話されていました。研究室の入り口に、学生達の手で「國尾道場」と書かれた大きな看板が掛けられ

たのは、研究室を開いて間もなくのことでした。学問の教えにとどまらず、人の生き方にも関わる大切な教えをいただいた國尾先生に、道場の門下生として改めて感謝申しあげ、ご冥福を心からお祈りいたします。

(名誉教授 清水真佐男)

野口 裕久先生

野口裕久先生が2008年8月22日午後8時30分にご逝去されました。享年、48歳でした。野口先生は、1994年4月に慶應義塾大学理工学部機械工学科の専任講師として採用され、14年と4ヶ月、慶應義塾大学の教育と研究に尽力され、多くの優れた人材を卒業生として送りし、また、多大な研究成果を挙げてきました。

野口先生の研究業績の高さは、誰もが

認めるところで、国内外で多くの賞を受賞されおり、CAE の第一人者として高く評価されていました。年齢的にも、その分野の研究をリードする立場となって、研究者としてのみならず指導者としても、これから一層の飛躍を考えていた段階であり、非常に残念なことでありました。

また、野口先生は、卓球、音楽など趣味も多彩で、多くの人たちとの交流があり

ました。そのような関係で、野口先生のご 逝去には多くの方々が悲しまれました。

慶應義塾大学を CAE の世界拠点とする 夢半ばでありましたが、その思いは、教 え子にて達成されることを楽しみとして、 天国から安らかに見守って頂きたいと思 います。ご冥福を心からお祈り申し上げ ます。

(システムデザイン工学科教授 青山英樹)

上松 公彦先生

上松公彦先生が平成20年12月22日に享年66歳でご逝去されました。日本熱物性学会の功労賞を10月に受賞されたばかりでした。先生は普通部から慶應義塾に入られ、昭和47年に工学博士を取得されすぐに助手として任用され、平成元年に教授に就任されて平成20年3月のご退職まで慶應義塾のなかでご活躍されました。ご専門は、流体熱物性計測のなかでも高圧物性を得意とされていました。日本学術会議の研究連絡委員会幹事をはじめ、日本機械

学会(フェロー)、日本高圧力学会、日本熱物性学会、化学工学会等に所属され、数多くの役職を歴任されております。特に、学術振興会蒸気性質第139委員会の幹事として、谷下市松先生とともに長い間、日本の蒸気性質に関する産官学のまとめ役として大きなご貢献をされたことは特筆に値します。昭和50年には、フンボルト財団の資金によりドイツのカールスルーへ大学物理化学研究所の招聘研究員として留学され、高圧物性に深く係る機会になったと

推察されます。研究室では、一人一人の 学生と長い時間をかけて根気よく丁寧なご 指導をされていました。剣道を愛し、大学 と高校で剣道部のご指導を続けられ、関 東学連剣友連合会副会長、東京学連剣友 連合会理事なども歴任されました。長きに 渡りご指導賜った者として、ここに皆様と ともに感謝の念を捧げ、先生のご冥福をお 祈りいたします。

(システムデザイン工学科教授 佐藤春樹)

早川 光雄先生

平成21年1月28日、名誉教授の早川光雄 先生が心不全のために逝去されました。享 年84。先生は日本の科学ロシア語の先駆的 存在で、関連するご著書も多く、私にとって はロシア語の直接の恩師でもありました。先 生はご自分にもご家族にも厳しい人でした が、どういうわけか私にはやさしく、「科学技 術ロシア語単語集」(白水社) や「マクスウェルの生涯」(東京図書) の著作・翻訳に際しては、下働きの私を共著・共訳者にして下さり、テニスの手ほどきもして下さいました。

29日夜、奥様からのお電話で聖蹟桜ケ丘のご自宅に駆けつけた時には、お座敷にきちんと寝かされ、家族に囲まれていました。

先生は大好きだったお風呂で倒れられたというお話でした。寝顔のような安らかなお姿を見ていると、今にも起き上がって「あれ、金田一君、来てたの。ちょっと飯でも食べていきなよ!」とおっしゃりそうでした。先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(日吉・ロシア語教授 金田一真澄)

最近の就職状況について

学生総合センター(矢上支部)就職担当副部長 川嶋 弘尚

理工学部、理工学研究科の2008年度の就職状況は図1~3、表1に見るように、昨年と同様で大きな変化はありませんでした。

2009年度の就職活動に関しては現在進行中ですので明確な事は判りませんが、本年度は社会環境が大きく変化しています。一つは言うまでもなく、2008年度後半からの景気後退です。関係者の予想では採用予定者は2008年度の30%減とも言われています。このことはすでにマスコミ等で取り上げられていますが、実はもう一つ大きな変化があります。

2008年7月に(社)国立大学協会、公立大学協会、日本私立大学団体連合会が日本経済団体連合会等、全国140の業界団体や企業に「早期内定」の是正を求める要請書を提出

しました。これを受けて2008年10月には日本経済団体連合会及び国公私立の大学、短期大学及び高等専門学校で構成される就職問題懇談会が正式な内定日を10月1日以降とし、選考活動早期化の是正を双方で策定しています。大部分の企業が4月1日以降に選考活動を開始したことは前進だったのですが、選考活動のスケジュールは例年とあまり変わっていません。このことは学生にとっても、企業にとっても充分に時間をかけることなく選考活動が終了していることになります。次のステップとして企業と大学の関係者の間でこの点を議論すべきと思われます。

大袈裟に言えば、2009年度の学生は社会環境の変化によりダブル・パンチを受けていることになります。教職員の皆様の日頃のご指導が重要かと考えております。

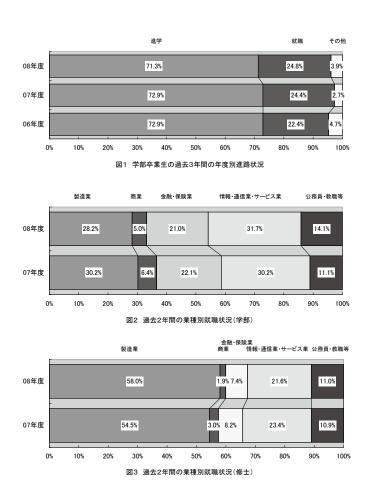


表 1 2008 年度 就職状況·採用会社等一覧(学部+修士)

学部 262 名 (内女子 50 名) 修士 619 名 (内女子 95 名) 計 881 名 (内女子 145 名)

() は内数で女子

会 社 名	計	会 社 名	計	会 社 名	計
ソニー	47 (8)	三菱東京 UFJ 銀行	5 (4)	クボタ	2 (1)
キヤノン	43 (4)	IBM ビジネスコンサルティングサービス	4	昭和電工	2 (1)
野村総合研究所	23 (3)	花王	4 (3)	新日鉄エンジニアリング	2
アクセンチュア 	18 (1)	関西電力	4 (1)	新日鉄ソリューションズ	2 (1)
トヨタ自動車	16	大成建設	4 (2)	住友信託銀行 	2
NTT データ	15 (4)	電通	4	住友不動産	2
東芝	15 (4)	東日本電信電話	4 (1)	第一生命保険	2
日本アイ・ビー・エム	15 (3)	三井住友海上火災保険	4 (1)	中部電力	2
日本電気	12 (2)	三井住友銀行	4 (1)	千代田化工建設	2
日立製作所	12	三菱商事	4	ディー・エヌ・エー	2
富士フイルム	12 (2)	旭化成	3 (1)	TDK	2
KDDI	11 (1)	旭化成エレクトロニクス	3	電源開発	2
みずほフィナンシャルグループ	11 (1)	エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ	3	デンソー	2
日産自動車	10 (2)	エヌ・ティ・ティ・ドコモ	3 (2)	東京急行電鉄	2 (1)
東日本旅客鉄道	10 (2)	キーエンス	3	東芝ソリューション	2 (1)
本田技研工業	10 (2)	コニカミノルタビジネステクノロジーズ	3	東レ	2
野村證券	9	ジェイエスアール	3 (1)	特許庁	2
リコー	9 (1)	シスコシステムズ	3	西日本電信電話	2
旭硝子	8 (1)	資生堂	3 (3)	日興コーディアル証券	2
新日本石油	8 (1)	住友商事	3	日本興亜損害保険	2
パナソニック	8	双日	3	日本航空インターナショナル	2
JFE スチール	7	第一三共	3 (2)	日本生命保険	2
全日本空輸	7	テレビ朝日	3	日本ヒューレット・パッカード	2
東海旅客鉄道	7 (1)	東京証券取引所	3	農林中央金庫	2
東京瓦斯	7 (1)	凸版印刷	3 (1)	博報堂	2
東京電力	7 (2)	西日本旅客鉄道	3	日野自動車	2
日本電信電話	7 (1)	日興シティグループ証券会社	3	平成建設	2
富士通	7	日本オラクル	3 (1)	ボストン・コンサルティング・グループ	2 (2)
三菱電機	7 (1)	日本放送協会	3	三菱 UFJ 証券	2
三菱 UFJ 信託銀行	7 (1)	任天堂	3	森ビル	2 (1)
THI	6	富士ゼロックス	3	横河電機	2 (1)
新日本製鐵	6	みずほ情報総研	3	りそなグループ	2
大日本印刷	6 (3)	三菱化学	3 (1)		
大和証券エスエムビーシー	6	三菱重工業	3		
東京海上日動火災保険	6 (1)	村田製作所	3		
ブリヂストン	6 (1)	明治安田生命保険	3 (1)		
三井物産	6 (1)	アサツーディ・ケイ	2		
シャープ	5	アビームコンサルティング	2 (1)		
豊田自動織機	5 (1)	宇宙航空研究開発機構	2 (1)		
日揮	5 (1)	オリンパス	2 (1)	※2名以上採用された会社等を記載	0
日本ユニシス	5	鹿島建設	2 (2)	※2009. 3月迄の進路届をもとに集計	トした。
	1			1	

学内学際共同研究で慶應発の技術を



物理情報工学科/基礎理工学専攻応用物理専修 准教授 松本 佳宣

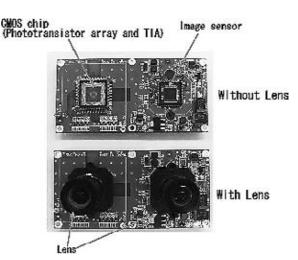
慶應義塾大学で研究・教育活動を始めて10年がたちましたが、その間常に慶應大学で何ができるか、何をなすべきかを試行錯誤してきました。私の専門の集積回路、センサ、MEMSの研究に関しては、設備、スタッフ、資金などの面では欧米の大学はおろか、国内・アジアの大学と比べでも優位にあるとはいえません。そこで自分の専門を深めるという考え方ではなく、応用を念頭に共同研究を行い学会の潮流に流されずにユニークでありながら将来開花する可能性のある独自のテーマを追い求めて来ました。

改めて数えてみると、10年間で12人の学内の先生方と 単年・複数年の共同研究の関係にありました。なぜ、こ こまで共同研究を行っているかは慶應発の技術をという 思いからです。自分単独の研究テーマの追求も面白いの ですが、共同研究では1+1が3にも4にもなる可能性を秘 めています。ただ、学際的な共同研究は、自分の知らな い知識を得られるメリットはありますが、逆に専門外に 出て行く事にもなり未熟者のままで終わってしまったり、 二兎を追うため自分の専門に関してもポテンシャルが下 がりどっち付かずの存在になる危険もあります。それを 防ぐためにも、学際共同研究は定期的なミーティングで 情報交換をする事が不可欠ですが、学内共同研究者の方 が他大学、他の研究機関の方よりも効率が上がりかつ長 続きします。この際には、各学部が渡り廊下で地続きの 狭い矢上キャンパスも利点になります。また、会議や食 堂などで顔を合わせる機会が多いのもスムーズな情報交

換に一役買っています。

これまで、いろいろな共同研究を行ってきましたが、現在主に取り組んでいるのが情報工学科中川先生との可視光通信プロジェクトと生命情報工学科柳川先生とのIVV法によるタンパク質スクリーニングチップの開発です。どちらも、慶應大学発のアイデアであり、それを集積回路、センサ、MEMS技術で具体化して行く事が私の役割分担です。私の専門分野では、様々なものが高度・高価になりすぎたため、何ができるかではなく、それをどう使い役に立つものを作るかに関心が移ってきています。そういう意味では、学際分野の研究テーマを持っている立場が優位になってきました。これまでは、自前の設備と外注を併用したファブレス的な研究スタイルでしたが、ファブレスで成果を上げるには設備を持つ人以上に設備の性能、種類を学び、慎重な思考にもとづく設計が必要になります。この研究環境の中でも良い設計・評価ができる学生が育ってきています。

一方、慶應大学でもマイクロ・ナノファブを整備する動きがあり、10年目にしてようやく世界の大学と互角の環境が整いそうです。ただ、他機関とは違う慶應大学の良さをうまく生かした特徴のある設備となるように整備に協力していきたいと考えています。これらがうまくいき、慶應のポテンシャルとの相乗効果で世界に発信できる技術が慶應大学理工学部から輩出される事を夢見ています。





集積化アレイ状受光素子を用いた可視光通信用受信システムと受信ソフトウェアの画面

日吉は今~~~



日吉キャンパスにおける新たな交流の場

小原 京子

近年日吉キャンパスを歩いていて感じるのは、キャンパス全体が明るくなり、あちこちに学生達を中心に集いや憩いの場ができ、それら が広がってきていることです。来往舎1階のシンポジウムスペースでは様々なイベントが催されているだけでなく、お昼時にはお弁当を食 べるたくさんの学生達で毎日にぎわっています。2005年に新しくなった食堂棟内には一般の方々の姿もよく見られます。また、昨年竣工 した協生館前のサンクンガーデンと、改修された陸上競技場を見下ろすベンチは早くも老若男女の憩いの場となっています。

そんな中で、2009年3月に竣工した第4校舎独立館地下の「日吉コミュニケーションラウンジ」は、日吉キャンパスにおける新たな交流 のための場として期待されています。ここには、和室「日吉の家」、ラウンジ、インフォメーションスペース、学生活動支援スペース、日 吉グローバルスタジオ、の5つのスペースが連なっています。多文化交流や、既存の枠にとらわれない教育・塾生の活動のために設置され ました。

このように、交流のためのハードウェアが確保できた今、ソフト面、つまり私達の意識の方はどうでしょうか?理工学部内でも、日吉 (外国語・総合教育教室) と矢上の教員間の研究・教育面での交流は最近あまり盛んとは言えない気がします。「最近の学生は自分の専門以 外の世界を見ようとしない」と嘆く前に、まず私達教員が率先しなければと思う今日この頃です。



同窓会研究教育奨励基金による同窓生の表彰について

9回目を迎える今年度の表彰は、学生のキャリアパスの一環として「理工学部の先輩からの助言、生きがい発見」と題し、4月4日(土) に矢上キャンパス創想館マルチメディアルームにて、4件の表彰者および2件の功労表彰者による表彰式典ならびに講演会を開催しました。 本年度の表彰者および講演タイトルは以下のとおりです。

- ・持丸 正明 氏(機械工学科1988年卒(独)産業技術総合研究所デジタルヒューマン研究センター)「挑戦ーヒトはどこまで数式で表現 できるのかし
- ・野本 和正氏(物理学科1989年卒 ソニー(株)先端マテリアル研究所)「分子からつくるトランジスタと柔らかいディスプレイ」
- ・佐々木達也氏(電気工学科1983年卒 日本電気 (株) ナノエレクトロニクス研究所)「企業の研究開発の目指すもの」
- 真氏(物理学科1992年卒 京都大学大学院理学研究科)、長谷川厚志氏(計測工学科1989年卒)、千葉 信一郎氏(機械工学 科1990年卒)、高橋 繁樹氏(物理学科1996年卒)「マッキンリーの烈風に挑戦して」(理工学部体育会山岳部 OB の貢献)
- ・「功労賞」吉本 和彦氏(管理工学科1970年卒(株) CSK-IS)「危機管理における CIO のリーダーシップー NY9.11テロからみずほ銀 行統合、郵政民営化まで一」
- ・[功労賞] 平林 義彰氏 (応用化学科1966年卒 (株) 常栄) 「『化学実験』 40年」

仕事のおもしろみや現役学生へのメッセージを交えた表彰者による講演会は、120名を超える学生、卒業生や教職員の聴衆を集めました。 来年度も同様な表彰が行われる予定ですので、ふさわしい方がおられましたらご推薦ください。詳細は、運営委員会事務局(理工学部総務 課気付)までお問い合わせください。



第10回矢上祭について

これまでの多くの塾生・教職員・理工学部同窓会・近隣住民の皆様のご協力により、矢上祭は今年記念すべき第10回目の開催を迎えます。今 年のテーマは「New Wave」。過去や伝統の垣根を超え、新たな祭のカタチへ。そうして起こる新しい波は来場者をも巻き込み、さらに大きなうね りへ。委員だけでなく、矢上祭に関わるすべての方々に祭の魅力を伝えていけるよう、日々準備を進めています。

矢上祭では研究室見学や来場者参加型の実験教室のような、理工学部ならではの企画を始め、ミス・ミスターコンテストやお化け屋敷、縁日な ど、バリエーション豊かなコンテンツを展開し、幅広い年齢層の方々にお楽しみいただけます。中でも最終日にグラウンドで催される打ち上げ花火 は、本格的な演出で毎年好評です。委員一同、皆様のご来場を心よりお待ちしております。

日時:2009年10月10日(土) 12:15~19:00、11日(日) 10:00~19:00

場所:矢上キャンパス 公式 HP:http://www.yagamisai.jp/



KEIO TECHNO-MALL2009 (第10回 慶應科学技術展) 開催について

慶應義塾先端科学技術研究センター (KLL) では、理工学部における研究成果を社会に還元し、産業界との連携を強力に推進することを目 的として、KEIO TECHNO-MALL (慶應科学技術展) を開催致します。本年も実物や実演を重視した展示により新しい研究成果を積極的に発 表していくほか、KLL 創設10周年を記念したイベントや、ラウンドテーブルセッション、理工学部教員による技術セミナーなど、多彩で魅 力的な内容を予定しております。ご多忙とは存じますが、多くの皆様のご来場を心よりお待ち申し上げております。

理工学部報編集委員会

場所:JR 有楽町駅前「東京国際フォーラム ホール B7・B5」 日時:2009年12月11日(金)10:00~17:00(予定) ※詳細はKLL ホームページ(http://www.kII.keio.ac.jp/)をご覧ください。

編集

理工学部報 第58号

発行者 大 下 享 治 発 行 慶應義塾大学理工学部

〒223-8522

横浜市港北区日吉3-14-1

電 話 (045) 566-1454 (ダイヤルイン)

印刷所 (有) 梅沢印刷所

平成21年9月20日発行

田中敏幸 責任者